

イワクラ学のステップ(1)

鈴木 旭

イワクラ(磐座)とは何か。第一回は、ここからスタートした。

そして筆者は、佐治芳彦さん(本会名誉会員・古代史研究家)の言を引用し、神の御霊が鎮座まします山中の大きな岩のことをイワクラ(磐座)ということ指摘した。

続いて、欧米と日本、学界と宗教界の間では概念上の相違があることを指摘した上で、實際上、どういふ形で考古学的な遺跡調査と接点を保ちながら、イワクラ研究を進めてきたのか。空論的な大言壮語を排し、着実に歩みを進めてきた者の一人として成果の一端を紹介した。

ともすると、われわれは独善的な見解発表をして満足してしまうものであるが、筆者の場合、正式な黒又山総合調査団の一員として

『報告書』にまとめたことを紹介させていただいた。いま、大切なのは、こういう姿勢である。個人的な楽しみでイワクラ探査をすることもあるかもしれないが、それさえも遊びのためではない。自分の言動に責任を持たなければならぬ段階に移っている。

さて、今回はイワクラ探査に取り組んで行く上で、いつもぶつかる問題を取り上げたいと思う。それは「ペトログラフ」という用語である。筆者は平成年間の初め以来、この用語をお使いになる方々とはお付き合いがなくなってしまうので、詳しいことは不案内なのであるが、どういふわけか、行く先々で鉢合わせする。そういふわけで、どうしても避けて通ることはできないらしい。ニアミスはないのだが、必ず間接

接触がある。たとえば、古い話になるが、あれは平成八年(一九九六)四月十三日のことだった。私は岐阜県恵那郡山岡町の長谷川俊明さん、愛知県名古屋市の安藤国輔さんのお二人に連れられて恵那市のイワクラ探査をして歩いた帰りのことだった。長谷川さんがハンドルを握りながら口を開いたのだった。

「一つ、聞きたいのですが・・・ペトログラフのない岩は文化財として価値がないんでしょうか」
どこか、思いつめたような響きがあるように聞こえたのは耳の錯覚だろうか。私は反射的に答えた。「そんなことはありません。そもそも磐座として祭られたご神体岩ですから、ペトログラフの有無で価値が決まることはありません。まったく文様のない磐座もありま

す。それよりもどうしたのですか、そんな質問をされるなんて・・・」
「ええ、恵那の人に山岡町の山中にある岩について話をしたんです。そしたらペトログラフのない岩など価値がないって、そう言われたんです」

「そうですか。それは誤解ですね。いま申し上げた通りです。まったく文様のない磐座もありますが、それで価値がなくなるわけではありません」

そう言って磐座とは何であるか、説明させていただいた後、「イワクラ調査のポイント三カ条」と題して基本的な視点と調査のノウハウを伝授申し上げたのを記憶している。それは確か、次の通りであった。

「第一条」 まず岩(磐座)の形

と大きさ、そして、向き(方位・方角)を計測した後、その周辺状況を観察すること。何か、人工的な形跡が少しでも見られた時、先入観にとらわれずに正直に記録し、それが人工的に作られた可能性についてあらゆる角度から追求し仮説を立ててみることに。

【第二条】 次に、磐座がある場所を地図の上で広域的に把握し、周辺の遺跡や遺構・磐座、自然の山などの位置関係を計測することによって、関連性があるかないか、詳しく検討してみること。

【第三条】 最後に、磐座の表面にペトログリフが刻まれていないかどうか、観察すること。あるかないか、判らないような、小さなひっかき傷のようなものではなく、大きな条痕や溝に注目すること。

お粗末なノウハウかもしれないが、イワクラ探しが始まったばかりの当時としては画期的なものであった。当時は「ペトログラフ」と呼ばれていた。ペトログリフ、すなわち、古代岩刻文様が、岩の表

面に刻まれていてもいなくても、そんなことは全然気にしなくてもいい、と励ましたつもりであった。

また、磐座に刻まれた文様の意味を解読する場合、いきなりシュメールの楔形文字だの、ケルト人のオガム文字だの、外国の古代文字を先験的に持ち出すことは考えものだ。それよりも磐座の形とか、大きさとか、向きとか、磐座周辺の環境工学的情報を正確に把握することが大切だとも申し上げたように記憶している。

すると、長谷川さんは初めて顔に微笑みを浮かべて言うのであった。

「それで安心した。それならば、恵那のペトログラフ探しと違って、山岡町はイワクラ探しだ！ これでやれる」

この時、ペトログラフの呪縛から解放され、山岡町イワクラ文化研究会が事実上、誕生したのである。もちろん、こうなるにはなるだけの先行体験があったということとは言うまでもない。私自身はまったく気づかないことであったが、

長谷川さんと安藤さんは非常に大きなコペルニクスの転回を経験していたのだ。

それは恵那市の笠置山南麓にある姫栗地区の小学校跡地を訪れ、シュメール古刹文字のペトログラフで「大地男神ゲブ」と刻まれた立石があるから見学して欲しいと連れて行かれた時、私は白チョークで線を引いた模様以外には何も見えなかったもので、素直に「何も見えません」と答えたのであった。岩の表面に切削痕とか、打痕とか、人工的に刻まれた文様が見えなかったのだ。その対応を見て驚いたらしい。



写真：姫栗立石

さらに隣接する農地「花の霧島園(樋田信之三経営)」を見ると、

南西から北東の椿山神社に向かって巨大な岩がずらりと規則正しく並んでいるのが視野に飛び込んできた。しかも、その内の一つには巨大な目玉のペトログリフ、本物の古代岩刻文様(横三・五×縦二各メートル)が刻まれ、真西を向いて浮き彫りにされているのがはっきりと見えたのであった。



写真：花の霧島園目玉石

私は感動して叫んだ。「これですよ、本物のペトログリフというのは！ 皆さん、良くご覧になって下さい。堂々たるものです。大きいでしょう！ 縦横の大きさが三・五×二メートルです」

よ、見えるか、見えないような、そんなみみっちいものではないんです。何しろ神様に祈る、祈りの文様なんですから・・・」

圧倒的な迫力、スケール感の大ペトログリフを見た安藤国輔さんと長谷川俊明さんは、この時、初めて魂を揺さぶられるような経験をしたのだと言う。それまで見えてきたペトログラフとはまったく印象が違ったのだ。本当の感動があった。発見の喜びがあったのだ。

でも、まだ、よく判らない。よく判らないが、壮大な光景が広がるのを感じたことは確かであった。コチャコチャした、狭苦しい範囲の解釈論争ではなく、山岡町の広大な丘陵地帯に広がる巨石群を一度に視野に納めるパノラマ写真のように堂々たる広がりがあった。そこに本質的な違いがあることを感じ取ったのである。

クルマは、いつしか、山岡町の居守ケ池に面する龍神社に到着していた。山岡町の中心と見られる場所で、かつては「オス蛇神」「メス蛇神」と称される巨大な磐座二

体があり、古代山岡の中心に相應しいモニユメントとして祭られていたという。その説明を伺いながら龍神社社殿の裏側、つまり、東側に視線を移した時だった。お結び形の大きな岩が見えた。



写真：オスヘビ石神

「あの岩は何ですか？」

「どの岩ですか？」

「あの山の麓にある、お結び形の大きな岩ですよ。何となく唐突でしょう、あそこにあるのが・・・」

言うが早い、私は走り出していた。後ろから長谷川さん、安藤さんが付いて来る。筆者の目には大きな目玉のレリーフが刻まれて

いるのが見えていた。陰刻状のペトログリフではない。到着早々、いろいろなタイプの造形物があるのだということを教えられたわけである。

「おお、祈りの岩だ！」

私は又もや、喜びのあまり、大きな声を上げてしまった。ちょうどいい機会なので、恵那市姫栗地区の「立石」に続いて実物演習をすることにになった。私は岩の横面いっぱい広がる目玉を指さして、「ペトログリフとは本来、あるかないか判らないような微小なものではない。こういう堂々たるものなのです」と説明した。

続いて、「この山の上、東側にもっと大きな岩があるはずですが、ありませんか」と聞くと皆、不思議そうな顔をした。そして、「ええ、あります、どうして判るのですか」と言うので、私は「磐座は必ず、そこになければならない理由があるんです。どこでもいいわけではないのです。その法則を理解すれば、逆探査できるんです」と返答した。

長谷川さんと安藤さんは深く頷いた。この時には、伊藤道保さんもいたと思う。この三人こそ、山岡町イワクラ文化研究会設立の発起人となった人々であった。そして、その後の「第一回イワクラ・サミット」の呼び掛け人となった人々である。イワクラ学会の源流は、実は、この時点まで遡るのである。